

今のハヶ平は、昔、桜井の里と言われていたと。  
宿のはずれた大きな松の木が枝を茂らせて、日陰を作っていて、旅人の憩い場所でもあった。

ある時、その松の木に大きな蜘蛛が枝から枝へと、まるで遊んでいるかのように、巣をかけ始めた。すると、どこからともなく、大きな蜂が、蜘蛛を刺し殺そうと近づいてきた。蜘蛛は、必死に逃げようとしたが、蜂の動きが早くて、蜘蛛は今にもつかまわりそうだった。

ちょうどその時、帝の命令を受けて、八溝山にいる岩嶽丸と言う悪者を退治に行く、須藤権頭貞信が通りかかった。蜘蛛をあわれに思って、蜂を殺して助けてやった。すると蜘蛛は、たちまち本性を現わし、乙姫様に姿を変えて、貞信を那珂川の竜宮へ案内した。竜宮では、貞信が乙姫様の命の恩人となって、一族で大変なおもてなしを

した。そして、次の朝早く、お土産として二本の鏑矢を添えて、貞信を元の場所に戻り届けた。

そんなことがあってから、蜂を退治した所なので、人々は桜井の里を、「はちがたいら」と呼ぶようになった。

また、貞信が乙姫様からもらった二本の鏑矢を、次の朝、しみじみ見た所を、「矢朝見」と言うようになった。

## ひとロメモ

乙姫様からもらった二本の鏑矢のうち、一本の矢で岩嶽丸を退治し、もう一本の矢は那須の与一が、源平合戦の折四国の屋島で、扇の的を射落とした時に使われたと、伝えられています。

那須の与一は、貞信の子孫で、須藤権頭貞信と言う人は、那須家の元祖といわれています。